

## 福島第一原発「現地視察」から1年

昨年6月25日に福島第一原発の構内を視察した。帰宅してから多くのルポを書いたが、あれから1年に経った今、写真を見ながら、もういちど記憶を記録しておきたい。なお、構内での写真は「代表撮影」によるものである。

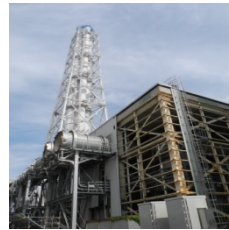


原発構内に入ると、汚染水を保管するタンクが目についた。このタンクの用地確保が限界に近づき、除去しきれない放射性物質、トリチウムを含む汚染水がたまり続け、どう処理するかが課題になっている。

放射線量が高く、バスの中からは近づけなかったが、壊れた原子炉建屋を見ていると、なんだか怒りがこみ上げてきた。1号機と2号機の間を通り抜ける時、線量計の値がぐんと上昇し、今なお活動を続ける原発を身をもって感じた。

原発視察を終えて、帰りのバスのなかで宮本憲一先生が次のように感想を述べられた。「原発が生きている。1～3号機に近づくと、急に放射線量がぐんと上がった。まだ危険極まりない状況だ。廃

炉に向けて、相当長い時間、技術が必要だろう。原発4基だけで、国土と多くの人の生活



を破壊した。このことの意味、被害の大きさを自分の目で確かめること、被害の地域を実際に歩いてみるのが大切だ」

写真は原発建屋を見渡せる高台で、東電社員から説明を聞く宮本先生ご夫妻をはじめ、現地視察メンバー。ぼう然と原発建屋を見つめる私。



帰宅してから、次のような感想を綴った。原発が生きっていて、強い放射線を出し続けているのを確認できた。とりわけ1～4号機を眺めながら、原発事故により取り返しのつかない被害をもたらしたことに、心の底から怒りが込み上げてきた。敷地一杯に広がるタンクや設備を見て、原発事故への際限のない困難な作業が実感できた。廃炉作業の作業員の群れに、原発事故処理にかかる膨大なエネルギーと費用を考えた。原発というものが、コスト的にもいかに割の合わないものかを、廃炉作業からも痛感した。

(2019年6月25日)